
ハロウィン企画「ハロウィンの夜に」@妄想部

妄想部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン企画「ハロウィンの夜に」 @妄想部

【Nコード】

N9765X

【作者名】

妄想部

【あらすじ】

お父さんが死んで3年。夜遅くまで働くお母さんを待つて家でお留守番をするお姉ちゃんと甘えんぼの弟が頑張るお話です。

今回は匿名投稿なので、どの妄想部員が書いたものか予想するお楽しみ付き 解答編は明日11月1日18時に投稿予定です。詳しくは活動報告にあります。

ハロウィンの日

うちに来たばかりの子犬が死んじゃった。

弟の拓海がずっと犬を飼いたがっていたから、私も面倒を見るからとお母さんをお願いしてやっと許してもらったのに。

お姉ちゃんである私はお母さんに信用されてるから。

いつも「お姉ちゃんはしっかりしてて助かるわ」ってお母さんは言うんだよね。

だって、私がしっかりしないといけないから。

お父さんは3年前に死んじゃって、お母さんは私達を育てるために毎日おそくまで働いているんだもん。

わがママは言えないじゃないね？

拓海は泣くばかり。

夕方からいきなり子犬のチョコは様子がおかしくなって、何か吐いてさっき死んじゃった。

お母さんが帰って来るまでにはまだ時間がある。

どうしよう？

だからずっと調べてた事を試してみる事にした。

前みたいに、学校から帰ったらお母さんが「おかえり」って言うてくれるように、私もわがママが言えるように、ずっと考えてた事があるから。

お父さんが生き返らないか、ずっと調べてたんだよね。

一番確実な方法は、まほうじんを描いてイケニエをささげて、それから・・・そうそう、たましいを引きかえにすればいいって。ちょうど友達からアクマ辞典を借りててよかった。

ついてるよね？

これでチョコも生き返るし、成功すればお父さんも生き返るはず。だから庭に出て拓海とまほうじんを描いて、借りた本を片手に呪文を唱える。

エロエロエロツサム・・・うまく言えない。
でもまあ・・・なんとかなるかな？

イケニエは冷ぞう庫にあった鶏ムネ肉100グラム38円。お買い得品。

546グラムもささげるんだから大丈夫なはず。

しばらくしたら、きれいなお月さまが雲にかくれて真っ暗になった。

それから急に、ドーン！！って大きな音がひびいて拓海と変わらず抱き合って目をつぶった。

耳がキンキンする。

でもそれにまじってチョコの鳴き声がした。

「おねえちゃん！！ チョコがいきかえったよ！！」

拓海のこうふんした声が聞こえる。
うるさいな。

この私が失敗するわけないじゃんね？

生き返ったチヨコを見て、ちょっと安心したのはないしょ。
これでお母さんにかっかりされない。

それから、チヨコは子犬のくせにお肉しか食べなくなった。

いくら鶏ムネ肉が安いからって言うてもさすがに困るんだよね。
どうしよう。

やっぱりお父さんが必要だ。

でもチヨコと違って、もう体はないんだよね。

お骨だけでも大丈夫かな？

今度の日曜日にお墓参りに行こう。

けつきよく昨日はお母さんがお休みでお墓には行けなかった。
だから今日はとりあえず、お父さんのお骨なしで試してみようと思
う。

拓海と一緒に庭に出て、またまほうじんを描く。

本はもう返しちゃったけど、大丈夫だよな？

前と同じ・・・っぽいのが描けたし。

イケニエはふんばつして鶏モモ肉100グラム78円を477グ
ラム。

近所では「トリック・オア・トリート！」って子供の声がする。

うちだって、前まではハロウィンだってしてたのに。

今はクリスマスだって、お母さんの手作りじゃなくて買って来た
ケーキを食べるだけ。

だから、これを成功させればお父さんが帰って来る。

その気持ちをこめて呪文を唱える。

エロエロエロツサム・・・。

すると、また雲が出てきてお月さまをかくしてしまった。

それから・・・音はしなかったけど、大つぶの雨が降って来た。

あわてて拓海と家に入る。

外はびっくりするくらいの大雨になっちゃった。

お母さん、帰って来れるかな？

電車止まらないよね？

すぐにお風呂に入って、寝る準備をしていたら停電した。

「おねえちゃん・・・」

もう！ 停電くらいによ。拓海は怖がりだからね。
懐中電灯だつてちゃんとあるんだから。

1階にあるから取りに行かないといけないけど。

ぜんぜん怖くなんてないんだから。
もうすぐお母さん帰って来るし。

拓海と手をつないで、1階に行こうとしたら、ドーン！！って大きな音がした。

「お、おねえちゃん・・・」

「大丈夫。近くにかみなりが落ちたんだよ」

拓海の手を強くにぎってあげる。

私が怖いからじゃない、拓海のため。

それから急に、ドンツドンツドンツ！！　って玄関ドアを誰かが叩く音がした。

「お、おねえちゃん・・・。だれか来たよ？」

「む、無視すればいいのよ。お母さんはカギを持ってるし・・・」

何回もドアを叩く音はひびいてたけど、無視していたらしなかった。

ほらね、大丈夫。

そう思っていたら、ビシヤリ、ビシヤリと家の周りをゆっくりと誰かが歩く足音がした。

「おねえちゃん・・・」

また拓海が怖がつてる。
もう、しょうがないな！！

「ちゃんと、戸じまりしてるから大丈夫」

「でもぼく・・・さっき、うらから家に入ったとき、カギかけわすれた・・・」

「バカ拓海！！」

拓海はいつもこれなんだから！！

急いでカギをしめて来ないと。

足音はいつの間にかしなくなってるから、どっかに行ったのかな？
そうに決まってる。

うちはお父さんが死んじゃってから、ビンボーだって近所の人も知ってるし。

拓海が怖がるから、しょうがないから一緒に1階に下りる。
ゆっくり、静かに、暗いけどなれてるから大丈夫。

「つめたっ！！」

暗い中で台所に入って勝手口のカギをしめようとしたら、なんか水たまりをふんだみたい。

「お、おねえちゃん・・・なんで床がぬれてるの？」

「拓海がさっきお風呂から上がった時に、体ちゃんとふかなかったんでしょ！」

「ち、ちがうよ・・・」

ちがうことなんてない。

拓海はいつもそうだから。

なんとかカギをしめてホツとしたら、2階からギシ、ギシって誰かが歩く足音が聞こえた。

「おねえちゃん、2かいにだれがいるよ・・・」

「チョコだよ・・・」

玄関の中でつないでたけど、また逃げ出して2階に上がったんだ。そうに決まってる。

ついでに懐中電灯を取って来よう。

ろっ下においてある懐中電灯を手に取っても明かりがつかない。なんで？

「拓海、また懐中電灯で遊んだでしょ？」

「あ、あそんでないよ・・・」

うそばかり。

ぜったい拓海が遊んだから、だから電池がなくなっちゃったんだ。

しょうがないからお仏だんのロウソクを使おう。

ほんとはお母さんに火は使っちゃダメって言われてるけど、しかたないよね？

お仏だんの部屋に入って、ロウソクは見つけたけどマッチがない。
ライターもない。

困ったな。

「おねえちゃん・・・あしおとが・・・おりてきてるよ?」

もう！ 拓海はうるさいな。そんなことわかってるよ。

チヨコがおりて来てるんだよ。

むかしのお父さんの足音に似てるなんて思わない。

だってお父さんは・・・今は暗くて見えないけど、お仏だんにある写真ではやさしく笑ってるし。

真っ暗な中で雨の音と、足音だけが家の中にひびいてる。

ギシリ、ギシリ、ギシリ。

だんだん足音がこつちに来るけど大丈夫。

お父さんが守ってくれるもん。

大丈夫！ 大丈夫！！

祈るように「大丈夫」を心の中でくり返して、息をひそめて拓海と抱き合う。

足音は気のせい！ そのうち聞こえなくなる！！

だけど、足音はふすまの前に来るとピタリと止まって、ガタンッとふすまが大きく揺れた。

それから・・・。

それから・・・。

「ジャジャジャジャーン！！ 毎度お騒がせしております、魂回収業者の悪魔でございまゝす！！」

ボタンツと勢いよく開いたふすまの向こうからなんだか明るい声がした。

おどろきすぎて悲鳴も出せないじゃない。

落ちつくために、吸って吐いてって息をする。

それから確認。

「・・・なんて言っただんですか？」

暗い部屋の中に立つ男はなんだか大きく見える。

「んゝ？ 聞こえなかった？ それではお兄さんがもう一度説明しよう！ 魂の回収に来た悪魔ですよゝ」

アクマ？ たましい回収？ 意味がわからない。

「・・・なんで？」

「なんでとは、これまたなんで？ ワンコの命を復活させてあげたよね？ あんな適当な魔法陣と呪文で。しかも、あのやつすい鶏ムネ肉で。パッサパサじゃん！！ あれで唐揚げしたら、めっちゃ不評でさ、さっきの鶏モモ肉でどうにか名誉挽回だよ。でも、あれも安物だよね？ ちなみに俺、唐揚げはゆずポン酢で食べるのが一番好きだから。お？ やつと電気ついた。今回の停電は長かったね？」

パツと電気がついて、ろう下からの明かりで見たアクマは黒ずくめのかっこうだった。

それに意外とイケメンじゃない？

ううん。それよりも問題は・・・。

「そんなびしょぬれで家の中歩き回られると困るんだけど。とりあえずはこの部屋から出て下さい。タタミがぬれます」

「おっと、ごめんよ。いや、いきなり雨が降って来るから焦ったよ。あれってゲリラ豪雨って言うんだよね？ 俺、必死で入れて言っつてんのに入れてくれないしさ。で、どっちの魂回収すればいい？」

アクマはそう言いながら、何か呪文を唱えてぬれた服を乾かした。すごい。本物なのかな？

ずいぶん拓海が静かだと思ったら、なんか寝てるし。おどろきすぎたみたい。

まあ、おしっこもらしてないからいいか。それにしても・・・。

「ひとつ訊きたいんだけど、アクマさんってじゅみょうはどれくらい？」

「ん？ 俺？ 俺はね、数千年ってところかな」

「じゃあ、待って下さい」

「何を？」

「たましいの回収」

「えゝ？ それはちょっと聞けないお願いだな」

「タダでとは言わないです」

「なにになに？」

「私と、拓海と二人分の魂をあげるから、だからあと80年回収を待って下さい」

「こらこら、それって人間の寿命を全うしちゃうね。いや、むしろお得じゃね？」

本当は心ぞうがバクバクしてる。
だけど、ここで引いたら「しっかり者のお姉ちゃん」が台無しだから。

頑張るんだ。

「そうかな？ 2人分も回収できるんだから良いと思うけど。それにさらにおまけをつけてあげます」

「・・・なに？」

「私たちのお父さんにならせてあげます」

「なんだって？」

「お母さんは早くに結婚したから、まだ30代前半だしお得だと思います」

「いやいや、あのね？ さつきから君、何言ってるの？ それに俺にも好みつてものがあつてね・・・」

「でも、お母さんは私に似て美人だし、気立てもいいんだよ？ 会社でもモテモテなんだつて。あ、ひょっとして、アクマともあるうものが人間の女性相手だと恥ずかしいとか、無理とか言わないよね？ 自信ないとか？」

「おいおい、俺が人間の女一人落とせないわけないだろ？ すぐに心だつて奪えるつつうの！」

「じゃあ、証明してください」

「おう、いいぞ」

「けいやく成立だね」

「つて、おい、こら」

と言う訳で・・・。

ハロウィンの夜、私と拓海に「唐揚げはゆずポン酢派」の新しいお父さんが出来ました。

チヨコをタダで診てくれたじゅう医さんつて事にして。

まあ、お母さんのてっぺきのガードを破るのはアクマも苦労したみたいで、正式にお父さんになるのは1年後だったんだけど。

なんでも本気で惚れた相手には魔力を使いたくなかったんだって。
アクマのくせに意外と純情だよね？

それから・・・。（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございました♪

正解は・・・???

はい。分かりやすかったですよね。「もり」でした

では、来月も新しい企画も決まっておりますので、よろしくお
願い致します!!

あ、まだまだ皆様からの企画も募集中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765x/>

ハロウィン企画「ハロウィンの夜に」@妄想部

2011年11月1日19時07分発行